

令和6年度境港市総合教育会議
会議録

令和7年2月20日

古徳課長

定刻となりましたので、只今より令和6年度境港市総合教育会議を始めます。はじめに、伊達市長よりご挨拶を申し上げます。

※伊達市長より挨拶

古徳課長

ありがとうございました。それでは議事に入りたいと思います。議事進行は市長にお願いしたいと思います。伊達市長、よろしくお願ひいたします。

伊達市長

そういたしますと、本日の協議に入りたいと思います。「コミュニティスクールについて」、事務局から説明をお願いします。

※築谷補佐、角補佐より資料に基づき説明

伊達市長

事務局より説明がありましたが、このことについて、教育委員の皆さまのご意見をお聞かせください。

渡邊委員

コミュニティスクールが導入されて、ほぼ10年が経ちまして、様々な成果が出ているなと思います。子どもたちの居場所がすごく増えていますし、昨日の境港市青少年育成研修会でも十河委員が講演で話されていましたが、地域の方々を巻き込んでCSと結び付けた活動も着実に増えてきていると感じています。私は中浜地区に住んでいるのですが、防災の呼びかけなど、地区のことを身近に感じられるCS活動が増えているなど実感しています。おそらくそこには、いろいろなご苦労もあると思います。なかなかうまくいかないこともあると思いますし、学校側も忙しくて協議の時間がとれず、地域側はやりたいと思っていることが学校に伝わりにくい、地域住民もどのように参加していけばいいのかわからない、ということもあると思います。教育委員会事務局のほうも、四苦八苦しながらやっておられるなということも、私も教育委員として、身近に感じているところです。現在、私は南部町で働いているのですが、南部町のCS活動も、始まって15、16年くらい経っています。ですが、現在も変化があって、地域も学校も苦労しながらやっています。なので、性急に進めていくことは難しいところがありつつも、今できていることを着実に評価していくことが大事だと思います。特に、顔が見える活動が大事だと思います。地域住民からすると、まだ点でしかみえない部分も

あると思いますが、点と点をつないで面にしていくことがすごく大事だと思います。昨日の講演をお聞きしながら、巻き込んでいく力の重要性を感じましたし、あまり苦勞を感じないようにやっていくというの大きなポイントではないかと思いました。CSはWin-Winの関係だとよく言われます。学校も教育課程の中で助かる、地域も元気になる。それがまちづくりに繋がっていくのだと思います。現在、210事業が行われていると教えていただきました。これだけ多くの事業が行われていると、新しいこともどんどんやっていると思いますが、マンネリ化も招いてくると思います。量ができたら、次は質についても考えていかなければならないと思います。そのために必要なのが、関わっている人たちの、どういうことをしていけばいいかを学ぶことだと思います。学校、地域、それからコミュニティの委員さんたちも、研修を受ける必要があると思います。フォーラムもその一環で、回数を重ねてすごくいい研修になっています。そういった研修にはやはりお金がかかりますが、いいものを作っていこうと思ったら、やはり研修は必要なので、研修費は確実に確保しておいていただけたら嬉しいなと思います。よろしくお願いします。私も、できることをやっていけたらなという風に思っています。

伊達市長

ありがとうございます。続きまして、十河委員お願いします。

十河委員

コミュニティスクールについては、私も三中校区でかなり関わらせていただいて、今、5年経ったところですが、ようやく何か形になってきたというか、動き出してきたかなという風な認識をしています。ただ、それは、地域学校コーディネーターの奮闘が本当にすごくて、本当に身を粉にして動いてくれたから回りだしたということを非常に感じています。なので、待遇面など、地域学校コーディネーターがもっと活躍できるような環境を整えていただきたいです。現在、週15時間の勤務時間で活動されていると聞いていますが、実際に活動するにあたり、その勤務時間の枠では不十分ではないかという風に感じております。実際、地域学校コーディネーターは、勤務時間の枠以上に、もう本当に身を削ってボランティアに近いような状況で動いてくださっているのではないかなと思います。本来なら、地域学校コーディネーターは各学校に1人ずつ配置してもいいのではないかというくらいの、活動の規模になってきていると感じています。公民館、小学校、

中学校を結ぶ役割としては、本当に負担が大きいだろうという風に思っていますので、何とか拡充をしていただきたいです。それとともに、コミュニティスクールの浸透の度合いがまだまだで、関わっている人だけが知っているような、周りからは、何かやっているみたいだくらいの認知度しかないような感じがしています。先ほど渡邊委員からもありましたように、研修など、認知をしていただけるような取り組みが必要だと思っています。公民館活動も活発にはなってきていて、公民館で子どもたちの声が響くと、お年寄りの方など、私たちも元気になったようなと言ってくくださる方も大勢いらっしゃるのですが、もっと認知をしていただいて、活動が深まって、地域で子どもたちを育てていこうという考えが広まるようにしていかなければならないのではと考えています。昨年11月の地域学校協働推進フォーラムで、川口有美子先生にお越しいただき、いろいろなポイントを教えていただきました。現在の状況で、本当に皆に情報共有ができているか、それぞれの立ち位置が理解できているか、振り返りをしながら前に進んでいったらいいのではというお話をしてくださいました。やはり私たちも、CSにいろいろと関わってきた中で、一度立ち止まって振り返って、本当に子どもたちや地域のためになっているかを再認識しながらやっていかなければならないと思います。たまたま三中校区は今、にぎやかに活動できておりますが、それも、停滞したり、後退したり前進したりしながらの活動になると思います。南部町のように、5年10年先、何年かかっても、活動を継続していくことで、地域や子どもたちが豊かになっていくのではないかなという風に思います。この間、ブックスタートという事業が始まってから20年経ち、ブックスタートが始まったころの子どもたちが保護者になるような時期になってきたと聞きました。20年かかってようやく一巡したというか、ここからさらに深まっていくというような形だと思います。コミュニティスクールについても同じように長いスパンでみていただけたらと思います。人づくりや地域づくりというのはやはり時間がかかることですので、性急に結果を求めるのではなくて、少し長い目でみていただきたいなと思います。

伊達市長

ありがとうございます。続きまして、大部委員お願いします。

大部委員

私は、コミュニティスクールの立ち上げの際に、生涯学習課に

在籍しており、現在は教育委員をさせていただいて、コミュニティスクールの経過を一緒にみさせていただいている立場です。コミュニティスクールはおそらく今後、地域ですごく求められる形なのではないかと思えます。ですが、やはり子どもに携わっていないとわからない組織なのではないかと考えています。私は教育委員をさせていただいているので、こういう活動をしているのだなとわかるのですが、なかなかその手法もわからなかったり、活動内容も見えなかったりすると思えます。また、何を目的としてコミュニティスクールが進んでいるのだろうかと思う時があります。境港市にとって、今の子どもたちや、これから続く子どもたちが、豊かな人材になってほしいということが目的なのか。ただ宿題をみてあげるよとか、遊び場がないから、公民館を居場所にするというの、目の前で起こっている課題の解決として、今という時間の経過の中ではとても必要なことだと思います。しかし実際、10年後、20年後を見据えて、逆算しての今という目線で、今が成り立っているのかというと、もう少し何か考えていけないといけないのではないかと思います。それは、時間が経過してみないとわからないことでもあるので、とりあえずやってみようという見切り発車も必要で、そういったものをわかってやっていただくのが、おそらくコーディネーターさんなのかなという風には思っています。そのコーディネーターさんについては、先ほど、十河委員からお話がありましたように、すごく奮闘していただいて、いろいろと、勤務時間に収まらないような業務をさせていただいていると聞きます。私も今、サッカーの世界で、鳥取県の中でコーディネーターをさせていただいています。私は、コーディネーターは、仕事がどんどん手から離れていくものだと考えています。自分が主になって動くのではなく、ちょっと仕掛け人になって、それが順繰りに動いていくものだと思います。そうなるまでには、3年とか、少し時間がかかりますが、仕掛けたものが回るようになってきたらうまく手を引くみたいなことが、コーディネーターさんだけでなく、周囲も理解していただいているのでしょうか。また、学校は先生の異動があり、市外から来られる先生にも地域のことを理解していただくには、やはり時間がかかると思えます。でも外部からの知識や見解というのもすごく大事で、うちはうちのやり方があるからだけではなく、外部のやり方も参考にしたいうえでどう融合させていくかというの必要だと思います。そのためにも、協議会や委員会で何を協議されて

いるかというのがすごく大事だと思います。それを、我々市民が知っていく、他人事じゃなく知ろうとしないといけないと考えるてもらえるような策を考えていかなければならないと思います。コミュニティスクールは、自分に子どもがいない、子どもに関わっていない、学校やPTAにも関わっていないと、自分には関係ないことだと思ってしまうと思いますが、そうではなくて、様々なことに関わってくることだと思います。そういったことを、皆さんの話を聞いたり、様々な立場になったことのある自分の経験から、考えています。

伊達市長

ありがとうございます。続きまして、中田委員お願いします。

中田委員

私は、現在は離れていますが、一中校区でCSの立ち上げの時に4年間委員を経験させていただきました。始まった当初は何もわからず誰もが手探りで、CSとは何だろうというところからのスタートでした。そういった中で、何ができるだろうかと考えていました。それと時を合わせて、鳥取県がCSの説明VTRを作成していたので、研修で見っていました。そういった時から考えると、CSとはこういうものです、というかつちりした感じにすると、こうあるべきだというのが先に立ってしまって、運営する上で余計にわかりにくくなるのではという感じを受けました。当初の説明では、学校の先生方の負担軽減であったりとか、地域と一緒に子どもを育てましょうという説明とともに、委員となったら自分たちが動かなくてもいいですよというような説明もありました。でも実際にやってみると、やはりそういう風にはいなくて、誰かが最初に走り出さなければということで、委員が動いていました。最初にそういった説明を受けてしまうと、自分たちが動いていいのだろうかとか考えてしまうと思いますが、そういったところも、活動していく中で、もっと自由にやってもいいのではないかなど、どんどん議論を進めていくことも、活動が始まってもう何年にもなるわけですから、やっていくべきではないかと思います。先ほどの説明の中に、当初の意識が薄れつつあるという話がありましたが、何年も活動してもうすでに一巡したわけですから、当初の意識は意識であって、という考えでおられたほうがよいのではないかと思います。まずは、CSとは何かというところから、学校や地域でやってきたことを振り返り、次への議論を進めていったらよいのではないかと思います。また、外部への活動の周知

も必要だと思います。以前活動していた私も、活動から一步離れた今、校区の中でCSで何をやっているのかというのは全然見えてこないし、聞こえてきません。活動をしつつ、いかに外部にも情報を出していくかということも同じように考えながらやっていく時期になってきているのだらうと思いますし、そうやっていかないと次が育っていかないという風に思います。そして、CSのことばかり話題に上りますが、学校運営にはPTAも関わっています。境港市の場合はPTAもCSもあるのだから、CSだけで活動していくのは非常に難しいので、一緒にやっていけたらいいのにと 생각합니다。私の感覚からすると、どちらかというとなPTAが学校に一番近い団体で、それに対して今CSができてきたということであれば、地域も含めてCSがPTAに入り込んでしまったほうが、もしかしたら一般的に理解しやすいのではないかと思います。ペアレンツとティーチャーではなくて、そこにローカルも入るとか、そういったように考え方を変えていながら活動していくということも、これからは考えていく必要があるのではないかと思います。それから、先ほどもお話があったように、CSで何かしようと思っても予算がないというのがあります。最初は会を運営するための予算しかつけていませんでした。それで、何がしたいかと考えたときに、どうやったらできるのだらうということから始めないといけなくて、コーディネーターさんも結構そこで四角四面に考えられて、予算がないからできません、いつかはしたいのですがと答えられたりします。でも、それでもやりましょうよと言って、実際にできたことも一中校区ではあります。やはり、そういった意見、知恵を出し合いながら、いつかしたいではなく、今したい、熱いものは熱いうちにとというような活動ができるような会にしていただけたらと思います。CSのPRについては、私も外部団体としていろいろお手伝いを、何年かさせていただいています。そのように、個々の団体で、話をしてみたら、自分のところだったらこういったこともできるよと言ってくださるところもまだまだたくさんあると思います。まずは知っていただくところから考えていけたらと思います。

伊達市長

ありがとうございます。教育長はいかがでしょう。

<00:31:15>

山本教育長

はい。私は、CSが動き出してから教育長になりました。今、交わること、巻き込むこと、そういったキーワードが出てくるよ

うになってきました。話し合う、俗にCSでは熟議という言い方をしますが、それが今までは、いろいろなところで単発で起こっていましたが、それが繋がる、先ほど渡邊委員がおっしゃっていた、点と点が繋がれていくようなものに変化しつつある時期に今、あるのではないかと考えています。そこで見えてきたもの、1つ目は、コーディネーターの獅子奮迅の活動によって何とか成り立っていたということです。ちょっと先を走ったり、上手に橋渡しをしたり、誘ってみたりしながら、地域の人と一緒にやれることを考えて動くことで、地域の人も、学校に入ることが苦ではなくなってきたように思います。その中で、コーディネーターがいつも大事にしてくださったのが、真ん中に子どもがいるという形で、それが学校を介して地域を繋いでくれたと思います。それを再認識しながら歩んでくださっているというのが私の感覚です。2つ目は、大部委員や中田委員がおっしゃられたように、活動している人はわかっているけれど、広報に努めていないということです。私も気づいていませんでしたが、なるほどと思いました。今は、SNSなどのツールもあるのだから、何かそういうものを積極的に使って行って、面白そうだな、行ってみようかなと思ってもらえるようにできればと思いました。昨日の十河委員の講演でも、自分がインスタグラムで情報をあげると、行きますと反応が来ると話されていました。そのようにSNSを有効活用することで、周知するだけだった広報活動が、双方向的にお互いを結びつける、新たな形の熟議というか、繋げる道具の1つになるのだろうなと思いました。導入期から充実期へ入っていく大きなポイントに、SNS、ICTの活用というはあるだろうなと思います。CSは、生涯学習課と教育総務課の両課に渡って行っていますので、連携を取りながら、活用について考えていってもらえたらと思います。

<00:34:20>

伊達市長

ありがとうございました。一通りご意見をいただきましたので、ここからはざっくばらんに発言していただけたらと思います。

その前に、これはちょっと事務局に確認したいことがあって。

まあ、教育活動、まあ、幅広く、できてきたという風におっしゃいました。説明ありました。という、郷土愛、子どもたちにとっては郷土愛も強くなってきているというような点もあります。子どもたちにとって、このCSがどんな効果があっているのか、今、長いことやって、6年目やって、ちょっと、学校の先生にどう効果があったか。地域にどう効果があったのか。南部町15年やっていて、いろいろ効果が出てきているところ、うちでもいっぱいあると思うんですけど、境港ではどうだったっていうところをちょっと聞いてみたい。だから、中田委員が言ったようにそういう、いいところがたくさん芽が出てきて、肥大もう花が咲くまでは行ってないかもしれないけれど、長い目で十河さん見ないといけないうて。そういうところをもっとどんどん中田委員が外へ出しなさいという、教育委員会も周知、学校のホームページでもいいです。どんどん周知して、こういうことなら私にもできるから、ちょっとやってみようかなという人が増えればいいし、行動変容も子どもたち起きました。公民館が従来の公民館じゃなくて、コミュニティセンターのようなことになってきた。だんだんいい方向になってきて。どんどんそういうことはいいことは発信する。登録者だって今、581名です。もっと増えるかもしれないです。事業ももっと増えるかもしれない。いいことはもっとね、出したほうがいいと思いますけれどね。そうすると、本当にもっと活動は、大部委員が言ったようにコーディネーターから手が離れるっていうのは、そういうところで、いや私がしますよってなっていくと、コーディネーターも手が離れていくということになるという風に思うし。ブックスタートが20年っていうのがありました。このCSで育った、本当に豊かなね、子どもが、地域にとって豊かな人材となって、CSを支えてくれるように20年たったらそうなるかもしれない。それでつないでいっていかないといけないのかなという風な、思ったところでした。私の感想と質問でございます。何か本当に効果が、例えば健作はだらだただけだなあ、ようけなんだったぞっていう、ほら。

<00:37:13>

築谷補佐

今の今割愛中で、元といいますか、教員でしたんで。子どもたちと関わるということについては、もっと子どもって一対一の関係で何とかしようとしてた発想なんですよね。意識の中で、地域のこんな人に会わせたいとか、このトピックだったら、あの人

に来てもらったら楽しいなっていう発想はなかったです。先生方が、地域の方が学校に入ってくることで、この分野はこの方に教えてほしいっていう発想が、先生方が徐々に見えてきたんで。ある意味、地域の方も使い出してきたという考え方ができるかなという風に思います。そこがまず1つ、教職員にとっての財産になって欲しいなと思います。大部委員さん言われた通り人事異動がやっぱりありますので、外部から来た人からすると、全くその地域との関わりがない中でのスタートなんですけど、そういう土壤があれば、本当に人が人をつなぐんだって言って、子どもたちにいい出会いができるってのはまず1つとっても大事かなという風に思います。それから、地域のほうの効果はということですけども。1月の末に二中で、拡大版の大きな熟議を行いました。地域の方が50名、子どもたちが100名という規模です、体育館でやったんですけども。十河委員さんも、地域代表で来ていただきまして。終わりにですね、もう本当に地域の方々が僕のところに寄ってこられて、来年はいつあるのっていう形です、すごい緊張したけど、子どもたちと話すのって楽しいねって言って帰ってくださった方がたくさんおられまして。やっぱり子どもたちと関わっていただくことで、地域の方お1人お1人が元気をもらえるっていうのが、まず最大の、やっぱり子どもたちの存在っていうかですね、そういったところを感じました。そういった意味で地域が、子どもたちを通じて元気になっていくということも、子どもたちでも返しましたし、ボランティアで来ていただいた大学生なんかにも、とっても地域の方が子どもたちが喜んだということをお返ししたと。そういった役割が、コーディネーターの役割なのかなという風に思います。その辺につきましては、十河さんに。

<00:39:50>

十河委員

やはり私も、いち保護者ではあったんですが、子どもたちと関わることで、自分がストレスがなくなっていく。こう、満たされていくっていう部分がすごく感じています。朝の挨拶運動であったり、読み聞かせボランティアっていうのをしていますと、何でこの子たちって、こんなすてきな笑顔をするんだろうとか、こんなおっさんに関わって、あっちこっちとか、なんてこの子たち純真無垢ですばらしいなっていうのが、パワーをもらって仕事に向かうんですが、その、大人、そういったパワーをもらおうと、やはり私も仕事で嫌なことがあっても、ああOKOKとか、気

がおおらかになります。ストレスがやっぱり減ってるんでしょうね。その、こんなこと全然OKOKっていう風になっていくのがよくわかるので、何でそんなに時間とって子どもたちのことに関われるのかとかっていう風にいろいろ聞かれるんですが、子どもたちに関わらせてもらおうと、自分が子どもたちがエネルギーをこう吸い取って、自分のパワーに変えて、多少のことなら全然OK、もうOKっていう感じになっていくのがすごくわかったので、関わらせてもらって本当によかったなっていう風に思いますし、地域のお年寄りたちも、やはりね今までの、どうしても従来の公民館っていうとどうしても、お年寄りの方が中心とした施設ではあったと思うんですけども、最近本当に子どもたちが活発に利用するようになって、やっぱりにぎやかな公民館が、誰も大人がうるさいなどと言わないと思うんですが、にぎやかな公民館に何か楽しげだなんてこって笑えるだけでも、お年寄りの方たちとか、元気になれると思うので、こういった効果っていうのは、おっきいなという風に思います。はい。よろしいですか。うん。

<00:42:03>

渡邊委員

お話を聞いてたので、何もしない合宿の話とか聞いて、地域の人と子どもたちが話をすると、どこの町でしたっけあの方。その町に大人になってその町に帰ってくるそうです。増えたっていう話をされて、そういった地域の方と、公民館で話を、居場所として、何かボランティアで。昨日ボランティアの、そういえば方も、自分も学校に、何かしたいからっていうことでボランティア見守りでボランティアをするってありましたけれども、そういった何かこう、やっぱりしてもらったことは、今度自分がどこかで、それはまあ、違うところかもしれないけれども、こう繋がっていつてるんだなっていうのを、講演聞かせてもらいながら思ったんですよ。なんかやっぱりこう関わりを、どういう風に今、縦も横も関わって、それを、しかもやっぱ楽しいっていうところや、役立ち感っていうところ、大人も子どもっていうところ。そこにはやっぱり、その地域じゃ、<00:43:23>おらが学校、私も **ことだて町**の学校に行って、えっ、地域の方にこんなところまでしてもらってもいいのっていうようなことが、こう、あって、やっぱりこう、してもらったらなんかして何かこう、お互いしなくっちゃってあの、なんですけども。何かそういう、何て言うのかな、お互いにこう支え合っていけるって言えばそこにはやっぱり楽しさっていうのは1つの大きな、巻き込んでいく力になるなという

ところで、自分たちの学校こんな風にしていきたいなっていうところで、やっぱ熟議をしていただけるとすごく、学校の共通の、子どもたち、地域の方だったら防災に強いまちにしようとか、そういうことを学校の中で作ろうとかっていうところで、話し合っていけるんじゃないかなということ、昨日改めて思いました。ありがとうございました。

<00:44:18>

伊達市長

たきうら？（地名）のたにだに？（学校名） 小学校おられてね、ここまで地域の方が学校に入っていくんだって思う。すごいですよね。

渡邊委員

すごいですよね。地域の人たちが学校を守ろうとされるので、すごく。

<00:44:32>

伊達市長

すごい地域の方が学校に入っていく。学校行事にみんな来ておられますもんね。

渡邊委員

言われました。すごい使うけん。いや、すいません。でも、それはやっぱり。

<00:44:52>

伊達市長

けど地域の方は本当に学校に役に立ってる。もうね、もう十河委員と一緒に、自己有用感がぐっと高くなっている人ばかりですよ。いきいきと活動してくださる。

<00:45:21>

山本教育長

本当昨日の十河委員のお話の中では、感想言われた保護者の方が、僕は十河さんになりたいっていう。つまりこのつないでいくっていう力は、こういう施しを受けたことを繰り返す、またこうやって本を送るようなことの繰り返しが、自然と、しかもそれは俺はあの役、また10年したらせないけんだか、じゃ全くないところで、発想されてるってところは、何か、ここを自然に取り組みめていく。当たり前で、それはそうしたからってなったら、一番、いいでしょうね。それこそ大部さんが言ったコーディネーターが手を離れていく。という当たりの、最初のその結びつけ役と動機付け、それから方向性を、こっちねと。全く反対方向に行ってはいけないわけで、その何か仕事を役割を、今はその、先ほども言ってくださったんですけど、そこにお金を少し、きちんとつけて、仕事の生業としてやれるコーディネーターがあって自走するようになっていくと、手を放せるように、またなるのかなって

うところに今あるんだろうなと思っています。

<00:46:42>

大部委員

質問にもなってしまうんですけど、我々が小学生とか中学生だったときは、学校の中ですべてが完結するような時代だったと思うんです。そこに、今こうやってCSっていうものが入ってきて、我々が親とか親よりもうちょっと上の世代ですよ。今、30代40代の方たちが親になって、多分60代ぐらいの方が、おじいちゃんおばあちゃんになってっていうその教育を受けた環境が違うじゃないですか、もう今。しかも探究学習っていうのが入ってきている中で、何かその、困り感というか、なんかそういうのもあったりもするんだろうな、今、今みたいに好事例ばかりじゃないようなこととか、例えば共有、今ここで、できるのかどうかとか、そのあと、さっき言われたみたいに、何か頼まれると悦に感じる方ってたくさんいらっしゃると思うんですけど、それをやっぱりもっと掘り起こしていくことができないかとかっていうようなことが、今ちょっと今話を伺ってる中で、今、逆にそのギャップが埋まっていったのか、それとも埋まっていないからまだ浸透性が薄いのかとか、いやそんなもん学校でするのが当たり前だろうと思っていたりする方もいらっしゃるかもしれないし、いや、もし自分の力でいいのであれば何でもするよって言ってくださる方もいる中で、その温度感とか。じゃあそれでもって、今後どうやっていったらいいなみたいな課題が多分出てくると思ってたらその辺の温度感というか何かありますか。何かやってられてきた中で。

<00:48:15>

築谷補佐

はい、よろしいでしょうかはい。はい。ありがとうございます。地域に開かれようとする教育課程の中では、やっぱり地元ということで、小学校のほうは比較的入りやすいっていうのは実際あります。で、学習をここまで到達させていくというよりも、子どもたちが調べてみて失敗を繰り返させていく中で、学び方を教えていう段階になってるっていうのはすごくあるので、先ほど角補佐の方からも協働学校本部でいろいろ、学校に入ってる活動が紹介がありましたけれども、比較的年間計画の中に入ってきてますし、先生方も、そこに、コラボしながら、子どもたちと関わって、実現できていると思います。それで、問題はと言いますか、中学校の方はですね、やっぱり先生方も、この3年間、教科指導っていうのがすごく大きなプレッシャーになってまして。ある程

度子どもたちに力をつけて、支えるというより、鍛えていくって
いう気持ちで、3年間、学習指導を行い、次の進路につなげてい
こうとされている中で、どうしても外部の方を活用するっていう
ことで、事前準備からその外部の方への御礼からですね、また子
どもたちの振り返りっていう、計画を立てるといふ余裕がないの
が正直なところでして。正直、そういう活動はちょっと控えたい
というような意見も実際出てきていますし、あらゆる分野の専門
的な企業さんも、こういった教育をちょっと中学校でやりたいん
だけどっていうお話は、たくさん、年間ずっとたくさんきている
んですけれども。紹介はさせていただきながらも、なかなか、学
校の中に組み込めないっていうのが現状としてはございます。上
手に教育課程とのすり合わせができてくるといいんですけれど
も。まあ、そういったところが1つ課題かなという風には思います。

<00:50:30>

大部委員

何か、わかったことが大きいかなと思う。はい。やっぱそう
なんだなって思うところと、やっぱなるほどなと思うところと、
じゃあ、それについて地域で何かできていくことは、今後、協
議していくのかなって。また我々も考えていかないといけないし。

<00:50:46>

伊達市長

中学校よりも小学校のほうが、やっぱり地域の人も入りやすい
のかもしれないね。

<00:50:57>

柳楽主査

今、中学校の意見が出たんですけど、子どもたちを見てると、
今、CSの活動が先ほどの角補佐からのあれで、地域でもいっ
ぱい行われるようになったじゃないですか。で、地域でやっぱり
貢献するっていうことを考えたときには、中学生の方がやっぱり
すぐそういった場があって、思いがこう実って、そこを褒められ
てっていうところが非常に感じるところであります。例えば、
全国学力学習状況調査の中に、地域や社会を良くするために何か
してみたいと思いますかっていうのがあるんですよ。それ見て
るとですね、小学校は大体、本当に8割ちょっとぐらいで全国と
ほぼ一緒ぐらいなんですけど、中学校は顕著で、今回は77.3%
の子が、思う、まあまあ思うみたいな、肯定的に77%これ
はやっぱね、全国よりも高い。だから、落ちない。なんとい
うか、小学校でそういう風に地域の方から学んだりとかして、
でも、今度自分たちが今度何とかっていうそういう思いの
ところの、落ちなくてそこは小学校より、全国とその広がって
るっていうの

がここ数字に出てきたので、やっぱり本当に皆さんに、子どもたちをうまく何というか子どもたちが自分たちでやって、上手くいったっていうのを味わえるような上手にそういった、そのさっき目的をちゃんとそれぞれが共有してっていうところがキーになるんですけど、そういうことがあると、やっぱり効果って、出てくるんじゃないかな。またそういった子たちがどんどん大きくなって行って、またね、家庭を持ったりしていってなると、変わってくるんだらうなっていう、非常に思ったところです。すみません。

<00:52:45>

築谷補佐

三中校区はやっぱり高いです。

<00:52:55>

十河委員

そうなんですか。嬉しい。三中校区では、公民館まつりに中学生にブースを企画させて、あえて、失敗させるというか、見守る。大人たちは口出さないでよってもう公民館の関係者でも黙って、何かあるんだったら僕通してっていう感じで言うんですけども。あえてこう、大人から見たら絶対それやったら失敗するがなっていうことでも、あえて失敗してもらって、自分たちで工夫して、どうしたらいいかっていうことを考えてそういったのを、ことを地域でチャレンジということやっておりますので、それが今そのような数字に表れてるっていうことを聞いてすごく、よかったなっていう風に思いますし、そういったコミュニティスクールで、そういった子どもたちを地域で育むということができてるんだなということを今、感じました。ありがとうございます。

<00:53:47>

大部委員

すみません。少し話が戻るのですが、先ほどその先生がやっぱり学校の授業でやらなきゃいけないんですか。何かこう、事前準備、実施事項みたいな。何かそれを、それを地域に投げるのが、これなんじゃないかなと私はすごく思ってるんですけど。その授業の3年間の中でやらなきゃいけないと思う、それがルールなのか、いやそういうことじゃないんですけど、っていうのであればなんかもっと投げて、地域じゃあもう本当にやってっていうので、それこそ、部活動が、これから外部指導者になっていくのと同じような形で、ただそれが先生が心配されてることですか。あんまり生徒構って欲しくないとか、そういうことではなくて。言い方間違えました。前はなんかそんなイメージだったんですよ。ちょっとなんか、ここまでは関わって欲しいけどここからちょっ

と関わってもらおうと。言ってることが違うと混乱するとか、子どもたちが。よく言われるんですね私も。混乱するから子どもたちが、って。いやでも、どっちも悪いこと言ってなくって、考えるのはこの子たちなんじゃないのっていうところを、徐々に大人にさせていくための手段ですよってというのが、あまりにも学校はこうしてるんじゃないですか、すごく先ほど言われたのと今話をしてるのを聞くと、そこにギャップがあるから上手くいかないのかな。だから、この協議の、熟議されてることの内容がどこまでされてるのかで、その取り組みが、それをコーディネーターがどうされてるんですかっていうのは、今後10年やってもそういう状態ではやっぱり進展しないですよっていうところがされてるのかっていうのは、少しちょっと何か今、疑問、疑問っていうか何かこうなのかなと思ったりしてたんですけどどうなのでしょう。

<00:55:35>

築谷補佐

その辺りは特に、渡邊特別支援コーディネーターが中学校長を務められていたのもありますし、渡邊委員がよくご存じじゃないかなと思うんですが。

<00:55:43>

渡邊委員

おそらく、教育課程というものがやっぱり学校にはありますよね。学習すべき内容。地域の中で、それができる、してもしなくてもいいよっていうな、なんて言いますかね、クラブ活動とか、あと課外活動とかっていうのはすごくやりやすい。だけれども、学校の中で取り組む教育活動っていうのはもう、学習指導要領に決められているので、ある程度こういうところまで子どもたち、あるいは児童生徒を到達させなければならないというやっぱ教師の使命感というのはどうしてもあるので、そこに向かってやっぱり行くには、じゃあ、ここではちょっと、地域の方に入ってきていただくけれどもっていうような活用の仕方っていうのは出てきているところがもしかして今大部委員が言われる、ちょっと四角四面のところ繋がりやすい部分がもしかしたら。

<00:56:35>

大部委員

任せられないのかなみたいな。

渡邊委員

任せられるところもあります。

大部委員

ちょっと土曜日、土曜日にするって。やりたい子たちがやれば

いいじゃんみたいな。

渡邊委員 そういう活動もちろんあります。

大部委員 感じとか別にそれは学校では関係ない。

<00:56:44>

渡邊委員 でもしてもしなくてもいい活動っていうのは、教育課程にはすごく少ないので、やっぱ難しいですよ。

<00:56:52>

大部委員 それは、だから、学校が抱え込んでやらなければいけないになっているのであれば。

渡邊委員 何を育てていくかっていうところだと、子どもたちにつけたい力っていうのは、ある程度こうやっていけば。

<00:57:04>

大部委員 それは位置付け？コミュニティスクールの位置付けがどうなのかなっていうのは少しちょっとまた疑問符というか、なります。学校ありきなのか。そうではないと思うのですが。別にその、例えば、1限目から6限目まである5日間のうちの1時間を別に取りなくてもいいんじゃないですか。7時間目は公民館に集まってみんなですればみたいな。

渡邊委員 多分それだったら別に。

<00:57:28>

大部委員 あとは7時間で誰かが、ね、学校に来てこのクラスは貸し出しできますよっていうことになるのかとかですね。そういうイメージは自分の中では何かこういうのかなと思いつつ。特に中学生になったら、例えばね、自分が就職をするっていうことにまた進学をするとかってなっていく。今度は具体的なことになっていくので。人生のそのねっていうのをなす。それを。

<00:57:55>

渡邊委員 そこをやっぱり熟議してやっぱり、あの、学校も、それから保護者も。じゃあその中のいろんな責任問題も、また、いろんなことも考えて、合わせてやっていかなければいけないのでやっぱそこ熟議が必要なんじゃないかなと。

<00:58:08>

大部委員 もしそれがね、いい方向に向かったらやっぱり子どもを育てる

なら境港市だよねがまたくる。横に並行して一緒に二軸になって
いたり三軸になっていたりするのが、これはこれ、これはこ
れって、なってってしまってるのが、そういう風に、何か横との
相談がうまく行かないのかどうかはちょっとわからないんですけ
ども。だったらそこに巻き込んで幼稚園の子来ればいいじゃんと
か、小学校の子来ればいいじゃんになるのが理想ですよ。

渡邊委員

そこは理想ですね。

<00:58:36>

山本教育長

そこは、何度も言ってますんで、やっぱり学校の教員の体質は
過去を見てそれらを踏襲していくっていう、その流れの中にまだ
あるので、一番端的にいえるのは、学校は、まだ先生のもんだと
思ってますから。これは地域のものである。子どものための地域
のものであるっていうところに、間借りさせてもらってここでや
るべき教育課程を実施してるとか。その意識に少しずつ、改造を
図って、ことあるごとに言っていますそれは。学校はあんたたち
のもんじゃないよって。力を貸してもらったり、教えてもらうっ
ていう専門官としての役割として位置付けはあるけど、地域とど
うやってコミットしながら前へ進むのかっていうところは、その
後ろだけ振り向いてちゃだめなんだって、右見たり左見たり、こ
う覗いてみたりしながら進もうやということは、はい。言ってい
ますので。やっぱ過去のものが切れない。そこに、よーし改革だ、
明日から学校変えるぞっていうところにまでは、一気にシフトが
できないってところが教育の営みの難しさだなあとは思う反面、
大部委員がおっしゃること。骨子の根底にあるところ、すごく感
じますので。また、やっぱり、間違えてないこの方向で行こうっ
ていうのを確認させてもらえたと思っておりますので。

<01:00:10>

渡邊委員

でも教師のやっぱりコーディネーターだという自覚は必要だと
思います。教師自身がコーディネーターにならないと、地域の人
を活用できないと思います。

<01:00:20>

築谷補佐

例えば、今のお話で、僕は英語の教師だったんですけども、
今、市のほうは全国比率でもかなり高い割合でALTが配置され
ていて。一斉に集めて、例えば英語のコンテストとかやったりで
すね、そのジャッジをしてもらおうとかっていうこともしたいんで
すけど、他の学校から取ることはできないんで。地域の例えば英

語スピーカーの知り合いがいれば、来てもらって、子どもたちの英語を聞いていただくとかですね、それで評価をしてもらうとかっていうことも考えたいなあと。近いうちにはですね。思ったり、7限目は英語のしゃべれる大人がいっぱいこの部屋にいますので、フリーでおいでよみたいなの、そういう英語サロンみたいなのをやったりですね、部活動だけに限らず、そういった課題活動なんかもしたいなっていう風に、夢を抱いております教育長。だめですか。

<01:01:26>

中田委員

どうしてもね今、話しの中で学校側からばかりっていう話じゃないです、やっぱり、あの先ほど、子どもたちも、地域貢献に意欲を持つという。でもやっぱり今の時代っての結構、企業が地域貢献っていう部分で、やっぱり自分の場合だ、どうやってCSを広げていったら、知ってもらったほうがいいのかなっていうことになったらやっぱり、企業が、私たちは、私たちの会社は境港のCS、コミュニティスクールを応援しています。名刺に貼ってもらえるような、そんな活動とかやっていくと。何か知らんけど会社の方からこれ書けて言われて書いているだけっていうことからやっぱ周知なりっていうところから始まって来るだろうし、そうすると、じゃ、自分たちは直接的なあれこれできないけど、ちょっとじゃあ活動費っていうことで何か協力したいよねっていうような、そういった話とかも出てくるはずだし、やっぱそういったことで、やっぱそういった何かこう、横の広がりをもっともっと底辺を広げていってというところで活動、学校側からだけじゃなくてその地域、お隣の建物の方から、いろいろとそういった協力してもらおうというような、そういった広報のやり方というのでも必要じゃないかなというのをとって思うところです。で、以前一中校区でCSののぼりを作らせてもらったことがあったんですけど、やっぱり、あれも、いや最初予算がないからできないよっていうのと、いやいやそうじゃないでしょっていうところちょっと声かけさせてもらったならもう本当にすぐに、予想以上の数集まってきてっていうところで、誰もがそこに対して嫌だとは絶対言わないしっていう。それを継続的にやっていけば、やっぱそういった目に見えるものも増えていくし協力者もどんどん増えていくし、協力することが当たり前になってくるそんな地域になってくるんじゃないかなという風に思いますので、やっぱり、もっともったこう地域を、いろんな会社を。教育したいっていう人っても

っともっとたくさんいるはずだっていうのは実感してますんで。何かそういった取り組みも、今後考えていただけたらなっていう風に思うところです。

<01:03:35>

伊達市長

角先生あの、地域学校協働活動の登録者581名って、どんな人がおるんですか。幅広でいろんな人がいるんですか。

<01:03:46>

角補佐

そうですね。各校区ごとに多分なってますが本当に地域の方もいらっしやって、もう十河さんも登録されていますし。で、まあ、

伊達市長

そういう登録者の方が、思いっきり活動ができてる。

<01:04:04>

角補佐

いや、なかなか実は。

伊達市長

そういうところか、やっぱり。

角補佐

数が増えていっても、なかなかそれはちょっと課題でして。どうしてもこの登録制度になってくると、新しい方も増える一方で、多分、民間の。

<01:04:19>

伊達市長

いやいやいや違う。登録者の人が思いっきり活動できてればそれでいいんですよ。大部さんが言われるように、やりたい人が幾らでもおって。私、活動したいよっていう登録。それを、活躍する場を自分らはできなければ、何か公民館で作ってあげたりとか、どんどんどんどんそうやって、まあ使うっていう言い方はないですけれど、役立ちたいという人に役立ってもらえばいいと思うんです。

<01:04:52>

角補佐

名簿がありますんで、そこにコーディネーターや学校はそれを共有していますんで、非常にそこは、声をかけて広げていって、それはそう。うん。

<01:05:01>

伊達市長

だから、学校の先生が十分に地域の人たちに協力してもらおうようになったっていうのは、ここの登録者の方に、協力してもらおうこともあるんですか。学校の方。

<01:05:14>

角補佐

学校はないです。中心はやはりコーディネーターや公民館がこ

ういう人を探して欲しいって言われて今回はそうですねつなげるっていう、そう。

<01:05:30>

伊達市長

そうですか。あの、弁護士さんも、六法全書全部覚えてるわけでは決してないんで、これはあそこに書いてある。私も、全部でき、ほとんどできんですよ。ああこれは、あの人に聞けばいい、あの人にやってもらえばって、それだけはたくさん知っているから。自分は知らないけれど。いやそう。そう。そうやって登録してあるなら、もうどんどん使う、使うという言い方ができんか。活躍する前へ、あそこせっかくってすごい人数がおるなっていう。うん。学校の先生は使えばいい。せっかくの人材なのに。子どもたちのために。この人たちだって本当に、自己有用感が高まって元気になる。十河さんが元気なの、ストレスがなくなっていいことですよ。ストレスがないってことは健康寿命がのびるってことですよね。このストレス社会で。

事務局のほうから、聞いてみたいことはありませんか。ちょっとCSで困っているんだけど、委員さんどう思われますかみたいな。ないですか。

<01:07:12>

伊達市長

私ね、本当に、地域の人が学校に関わってね、子どもたちがあれて、おじさんおばさんに世話になって、感謝をしちょうか、本当に□□□□じゃないんだけど、その子がほんと次そう□□□□人のために何かせないけん、そげな子どもたちになってもらいたい。わし思うんですけれど□□□□感謝っていうか、□□□□それを忘れないことが大事なんだよな。□□□□わしはなかなか□□□□私は忘れないからな先輩に□□□□今度は自分がせないけんと思う。体育会系の子ってそうだがな□□□□

<01:08:12>

角本補佐

忘れないですね。恨みも。

伊達市長

恨みもあるかもしれんけど、感謝のほうな。恨みのほうはね、しちゃいけんけん。こんなことされたからって後輩にもしたらあかん。わしはぜったいせんだったけど。

<01:08:40>

伊達市長

それでは「コミュニティスクールについて」は以上とします。つづいて「主権者教育について」、事務局から説明をお願いし

ます。

※若林主幹より資料に基づき説明

<01:13:40>

伊達市長

事務局より説明がありましたが、このことについて、教育委員の皆さまの、ご質問や普段思っておられることを自由にお聞かせください。今度は逆回りで、中田委員からお願いします。

<01:14:00>

中田委員

主権者教育っていうとちょっと非常に堅苦しくっていう風に聞こえてしまう。子どもたちにとってもちょっとこの言葉、文言自体がっていうことはあると思うんですけど、でも実際にその中で何がしたいか、自分たちのコミュニティの、社会の中で、自分たちのこと、我が事としてというところの感覚で言うと、先ほどのCSの活動っていう部分をとっても共通してくる部分、たくさんあると思うんですよね。どちらかというと、そういった地域との活動の中で、いろんな人と話し合いながら話をしながら、自分はこう思うんだけどこうするためにどうしたらいいんだろうっていうと色々な意見を認め合うというようなそういった、経験っていうのが、イコール、この主権者教育っていう部分にも繋がってくるんじゃないかなと。その上で、やっぱりこの地域をどうしたいかっていうことが出てくるだろうし、そういった活動をしていって、先ほどの話に戻ってしまうけど、自分たちが大人になったときにこの町に対して自分はこれがしたいあれがしたい。こうなって欲しいとかっていうような、そう思えるような、そういった教育っていうのが、やっぱそういう、あるんじゃないかなっていう風にちょっと思うんですよね。で、読めば読むほどやっぱりこれ繋がってるよねっていうんで、先ほど一番最後に説明された、県の方でも、いろんな、取り組みに対して意見を求めるとか、今実際、境港市なんかでもあるじゃないですか。いろいろと。声のところの活用っていう部分、意見ちょうだいしますっていうようなことであったりとか、あと何だったっけ。でもそういうことって子どもたちに対しても、この地域のことだよ、みんなどう思うっていう風に、各学校でもそういった細かい問いをどんどん投げかけていけば、やっぱり、この地域でこういうことが起きてるんだっていうことがわかってくる、イコール、主権者教育っていう部分にもなってくるんじゃないかな。それで、ああいった意見を求めるにとっても、境港の在住の人とやっぱり街を出て行った人

だったりとかっていう、そういったこともあるじゃないですか。子どもたちがいけないっていうわけでは書いてないはずだし、そういう、どんどんどん、そういうことを取り込んでいながら、子どもたちも投げかけていながらというようなことができたなら、それこそ主権者教育につながっていく。本音のところにつながってくるという風に思ったところです。

伊達市長
<01:16:21>
大部委員

ありがとうございます。続きまして、大部委員お願いします。

はい。失礼します。主権者教育ってなると少し、どういうことなんだろうという風になって今ご説明していただいたら多分学校の中でもいろいろ先生方が、こういうことだよっていうことなので、ああなるほどそういうことなのかっていうことで、多分認識をして、私も多分勉強したはずなのに何か、と思いますけれども、今私ちょっと幼稚園を関わっているので、これをちょっと見たときに、やっぱり家庭教育なんだろうなっていうところなのかなって思います。例えば、えっと、最初は1人だったけど、弟が生まれて、僕の部屋を2人で使わなければいけないってなったときに、私は私の部屋が欲しいんだっていう主張を家族でする、議論をするわけですね。でもそういうのが、今は多分なかったり、お子さん連れてきたときに、今日幼稚園に行く、行かないとかっていうようなことを玄関先で話してたりだとか、子どもに主体性をとか、いろいろ何かこう言われて子どもにゆだねるところも、いいんですけど、いや、ある程度は導いていく、会話の中で選択肢をして、じゃあこれがいいことなのか悪いことなのかとか、私はする私はしないというような、そういう本当の日常的な会話が本当に乏しくて、ここの教育に行くまでに至っていないのが、今現状なんじゃないかなって思います。コロナ禍も経て、本当に垂れ流すようにいろんな媒体からいろんなものが、入ってきて、聞かなくてもいいものを聞く。だから聞くべきものと、聞かなくてもいいものを精査もないまま、ずっと物事が目から耳から入ってきて、で、なんかそれすらなんかこう、何か整理ができないまま、こういうものを取り上げて教育しても、なかなかちょっと浸透には、何かちょっと難しく、でもこれも先ほど言われたみたいに、習得しなければいけないカリキュラムってなっていると本当に学校で大変なんだなって今、すごく思います。なのでやっぱり今幼稚園とか保育園とか、もっとそういったところから何かもうちょっ

とこう、導いていかないと、何かここに至るまでに、今後10年後とかどうなっちゃうんだらうとか、思ったりするのが逆に危惧されるのが今、本当の現状かなって。で、多分やってることはすごくいいことで学校の中でも、昔もああそうかな児童会の選挙とかやったとかああいうことが、そういう風に導かれてリーダーが生まれてくるんだなってのはわかるんですけど仕組みとしては持っていきたい仕組みとしては、学習の、そこに至るまでが今未熟すぎて、どうしたもんかなっていう方が何か、今何か実際思っている感じですか、ごめんなさい。これがどうのこうのっていう議論に、私の中では乗らない感じが今の現状で申し訳ないです、すみません、ごめんなさいっていうところで。すみません。

伊達市長
〈01:19:26〉
十河委員

ありがとうございます。続きまして、十河委員お願いします。

私も、その主権者教育すごく大事なことって、今大部委員が言われたように、家庭での話し合いだったり、議論っていうことで、積み重なって自分をこうしたいんだとか、自分の主張こうしたいからこうなるっていうことが積み重なって、主務教育に繋がっていくんじゃないかなとは思んですけども。やはり保護者も今、何も知らないといったら変ですけども、学校からいろんな発信していただいている中で、保護者が、ああそうだったんだっていうことも気づきもたくさんあると思うんですけども。やっぱり子どもたちが、自分たちが発言したり、こうしたいと思ってることで変わっていくってことをやっぱり、児童会の役員選挙とかっていうのを今境小と中浜小しかないっていうのはすごく寂しいなと思っていて、あのときって、子どもたちが自分はこの思いで、こうしたいんだっていうことを、みんなの前でこう、意見を出して、それに子どもたちはこの人がいいとかっていうことを考えて、選挙ってやったと思うんですけども、中学校の選挙を見てると、やっぱりそういうすごく感じる部分はあるし、僕たちはこういう中学校にしていきたいんだとか、そういう思いを、アピールはするんだけど、その芯が深くなってないっていうかすごく表面的な浅いところでの話に終わってるなあとという気はしています。やはりそこはいろんな新聞見たりとか、自分たち子どもたちが知識を深めたりとか、家庭教育、やっぱり家庭教育だとは思いますが、これについてどう思うっていうことでさっき、中田委員言われましたけど、パブリックコメントだったりとか、そういったこ

とを、境港市でこんなこと意見求めているけど、うちの家庭の意見としてどうなんだろうねっていうのが、家庭で話題として出るような。こうやっていくと、市長こんなこと言っとんだけど大丈夫かなと、例えば、そういう家庭の中での話題で、自分たちの住む町はどうしたいかってことで、先日三中の未来トークでも、中学生よく考えてるな、自分たちの町こうしたいなという意見持っているのに、それが十分に生きてないというか、なんかそこがこう何かうまく歯車がかみ合っていないっていうか、そういう風に。子どもたちはすごい自分たちのまち良くするためにこんなことしたいって思ってるんだっていうことがあっても、それはもう絵にかいた餅の状態で、これやったって変わらないって思ってるのか、いや、変わるんだよって。大人も一緒にそれ考えようよっていう大人が周りにいないからなのか。なんかそのコミスクの話でまた戻るんですけど、そういう地域だったり、家庭の力っていうのがやっぱり足りてないのかなという風を感じているので、これ学校だけじゃなくて、本当に家庭で、どうしていくか、自分たちの住む町をどうしたいかっていうことを、自分たちが変えていくんだ、この人にゆだねるんだっていうことをやっていかないと、町として存続が危ぶまれると思うので、小学校でこういう児童会、ちょっと先生方には申し訳ないんですけども時間を割いて、ね本当に、時間がない時間、こういうことに活動時間取られるのはちょっと大変かもしれないんですけども、境小や中浜小だけじゃなくて以前も昔は、どの学校にもあったと思うんですけども、そういったことってすごく積み重ねで大事かなという風を感じました。このやっぱりアグネスチャンさんの言葉じゃないけれど、どうせ変わらないじゃなくてね、自分にも変えられるっていう思いをねやっぱりみんなが持って、意見をすり合わせるとか、他者と意見を協調して、どんどん深めるとか、そういうことができるような、家庭教育ができる保護者になっていただきたいなという風に思います。

伊達市長

<01:24:07>

渡邊委員

ありがとうございます。続きまして、渡邊委員お願いします。

もちろん家庭教育も大事だと思いますが、学校教育はやはりすごく大事だと思うんですよね。つけたい力というか知識理解とか、思考力、判断力、表現力、それから、学びに向かう力とか、基本があるんですけど、主体的に学ぶ力、そこに、考えるを、やは

りこう、自分でもつってというのは、授業の中でやはり仕組んでいかなければいけないと思うので、それはやはり1年生でも、そういったある程度の知識がなければ、判断する力というのはできないんだと思うんです。そういったところが、学校の中でやはり、少しずつ少しずつその段階に合わせてなんだけれども、やっぱり、授業の中で、教育課程の中で、仕組んでいくっていうのがやっぱ、すごく、もちろん家庭教育大事だと思うんですけども、すごくベースではないかなと思います。で、日本の教育って、受験、さっきも言って教育課程の中で決められたことってあるけど、やっぱり受験なんですよ。それで、正解を求める教育を、私もしているかなと思うんですけど大反省なんですけど、やっぱこう、わかっているんですよ。話し合っ、こうやっている授業ってのはすごく楽しいし、うん。だけど、決められた教育の中で、それにはとっても時間がかかる。ディベートをしよう。いや、ディベートなんか特にいいですよ。相手の。自分はこういう考えじゃないけれども、相手の立場に立って考えてみると、そういった裏側も見えるのかということを見ることが出来るから、それは折り合いをつける力に繋がっていく。で、実質、本当に社会の中で、今困っているような問題を、ディベートで子どもたちに話し合わせて、じゃあ、自分たちの町をもうちょっと良くするにはどうしたらいいかみたいなどの意見を、つなぎ合わせていくのが、すり合わせていくのがさっきの三中さんとかね、そういったところにも繋がっていていると思うので、そういう、やっぱりこう、小さいときからの力っていうのをつけていかないといけないけど、多分先生たちも、そこは困ってると思う、時間がとってもかかるのでそういった内容の、ここ、この単元はこういう活動に使うんだとかってやっぱ重点を持って取り組んでいくのがいいかな、という風に思いました。多分、外国なんかやったら、シチズンシップ教育ってすごい前から技術なんかをやっているんで、そういう、実際のね、選挙を見せたりとか、そういったところの、本当に行ったりとかっていうようなことがあって、この間、境港でも、高校生が、何か未来会議開いてもらう、議会でね。そういったところの体験っていったところを、やっぱりこう直に見たりっていうところが、じゃあ今度市長が変わるから、何か、この人はこういう考え。その人はこういう考えを持っているっていうので、どういったところっていうのを、なかなかでもそこで学校の中で話せないってのも、学校教育のね。教員がね。だって、教員も投票権

持ってるんだけども、そうけどう？きどう？にね、なんていうの、なかなかねそこがやっぱりこう、難しいので、でもできることはあると思うので、偏りが無い政治教育っていうのももちろん必要だと思いますし、子どもに自分の考えをとにかく持たせるっていうことがやっぱり一番の基本なのでそこは、学校ももちろん、家庭も頑張らないといけないところかなという風に私自身はおもいます。すいません。

伊達市長

ありがとうございます。教育長はいかがでしょう。

<01:18:15>

山本教育長

はい。なかなか一言では言いにくいところがありますけども。まとめると、まとめるとか自分の中では「1票を投じる力」だと思ってます。それは相手に託すことにもなるし、それから自分の存在意義を確認できるところでもあると思うんですけど、今はもう、その意思で1票を入れに行かないって、自分の息子なんかは言います。何か、政治に対して離れていることがあるのか、いい具合に伝わらない何かをもっているのか。それを今の子どもたちに僕らが、中学生小学生に刷り込むことは果たしてその、むにゆう？な中で、やられてる行為なのかっていうことも考えてしまいますけど。ただ、やはり、民主主義、資本主義の国家の中では、すごく大切な1票投じる行為だろうと思うので、それを、本当はさっき、渡邊委員に言われましたけど、Aさんにはこういう具合な思いがあるんだ、Bさんには、アメリカ合衆国の、大統領には言えても、日本では言えない仕組みが、何か教育が存在してて、それは厳しく、政治的な指導はやらない、やれない。というところがある中で、なかなか難しいところがあって、当たり障りのないサラリーとしたことに流れてしまっているのかなあと。ちょっとまとまりませんが。

<01:30:06>

伊達市長

児童会長とか、生徒会長、選挙で決める学校もあれば、他はどうやって決める。

山本教育長

いや、ないんです。小学校はないです。ほかのところと違って。

<01:30:24>

柳楽主査

小学校のほうはなんか委員会活動の中の代表委員会とかそういうのは存在するんですけど、何かみんなにそういう、やっこっていう時期がちょっとあってでも、やっぱりリーダー育成って非常

に大事で、今少しずつまた復活しだしたっていうところで最初中
浜小で復活して、それが境小に、また広がっていけばいいなって
自分は、考えてるんですけど。

伊達市長 中浜小学校は、児童会長とか。

柳楽主査 あります。

伊達市長 選挙するんですか。

柳楽主査 はい。

伊達市長 昔と一緒に。

柳楽主査 もう、もちろん。で、自分はこんな風な学校にしていきたいと
かっていうところも何か、行ったらポスターとかにも書いてあつ
たりして、みんながそれをもとに、ていうところで、はい。

<01:31:02>

伊達市長 私も生徒会長の選挙のときは、私は応援弁士でした。これしま
せんかというときは、逆に、□□□□けど。そうやって本当に
生徒会長立候補したい、わたしはこんなことがしたいという思い
があって、それを私はくんで応援を、みんなの前で話すわけです。
それらは今なくなって、リアルな選挙みたいなことは、体験がな
いということになっています。ただ大部委員が言ったように、家
庭で、話が、会話が乏しいっていうような。例えば、子どもたち
が小・中学校で家に帰って、今日あったことでも何でもいいから
話すということは少なくなってきているのでしょうか、やはり。
私はあの、食育の幼稚園保育園の食育で、かに集会とかやると、
必ず、今日、帰ってお父ちゃん、おかあちゃん、家族の人にかに
を食べたってちゃんと帰ってしゃべって、買って買ってもらえよ
って言って。買ってもらうんだよって。魚の私はこうふけい？
ですから、そっちが大事ですから。やっぱそうやって、帰って会
話がないと、ねえ、町に関心もなくなりますよね全然。大体ね、
一番投票率があるのは、大体、ちっちゃいころから町に関心があ
って、そげな子どもが投票に行くへんだかと思うんですけど。何
でも関心がある。で、自分の住むところで暮らしのことだけん、
あいやあれして、国会議員が言っちゃうけれど、いやうち、わし

や□□□□って国民民主党にいれーわっていうことになると思うんですけど、やっぱり。関心がないと。全然ね、投票行動にならないだろうし。それはちっちゃい頃から町に関心がないと。政治なんかはどうでもいいんですけど、町にとにかく関心があれば、大人になったら、政治もねちっとは。自分の暮らしのことですもんね、たぶん。あーとおもうけど。なんでも□□□□から□□□□

<01:33:52>

渡邊委員

その基軸を、どこでその判断を。誰に投票すれば一番いいのかわかっていう、その基本の考えをやはり自分でもっていくということが。

伊達市長

□□□□に□□□□って自分の考えを持つことが大事だっていうのは。ちっちゃい頃から必要ですわね。大体この、ちいわか総選挙というのも本当にもっと、県の施策等が対象って書いてあって、私この行政懇談会ときにいけんって言っちゃったんだけど。こげなもん県の施策なんでどげでもいいがんで。町のことを、課題があって解決策がいっぱいあってそこにどれに投票させるかっていう、自分の身近なことじゃないと。そんなもんだめ。だめっていつちゃった。いけんって言っちゃった。いやそういうことはいいんですよ。投票は。

<01:34:48>

渡邊委員

何かメリットが。参加しなくてもそんな、しなくてもいいような、どうでもいいの。

伊達市長

県の施策って、気に入らんって言っちゃった。境港市の街の、うん。

渡邊委員

子どもは、行かないとすごい自分にデメリットがあると思うと、絶対します。

<01:35:11>

伊達市長

だからあの、子ども、その、前、松江の小学校の子どもたちが、町にゴミがいっぱいあって、ポイ捨てした。それを、帰るときに、3人ぐらいで拾って帰っているというのを記事で見たことある。それはだから、自分たちの町、綺麗なほうがいいからって考えて行動に移したんですよ。うん。だから身近な事のほうがいいと思うんですよ。最初のとっかかりは。町に関心をもつというのは身

近なことだからだと思うんですけど。

<01:35:52>

大部委員

日本人は、主語を持たないですよ、というところがあって。今小学校から英語を導入してるのはすごくいいなって思うんです。後から文法とかね。で、まずはヒアリングをして、必ず私ほっていう主語を使わなければいけない外国語は。日本語だけは使わなくても、両方の端々の言葉で誰かの気持ちを慮ってとか、それもすごくいい文化だなとは思いますが。なんかそういうところから、何かもしその教育をつなげていくのに、やっぱ英語を導入しているのであれば、何かそう、私はこう思う、なぜならばこうだからって言うようなことが、やっぱり自分の意見をみんなが持つ。それに対してじゃああなたは。私たちはじゃなくて私ほって言うようなことが、あると私は思っているんで、そういったところから何かね小学生からなぜ英語を導入したんですかみたいな。グローバルに人をすすめたいから、それもあるかもしれないけどやっぱり私の意見をもつって言うことがやっぱり大事ですよ。それには責任を持ってやっぱり主語と結論を、端的に言って、その理由はこうだからって言う思考をやっぱり育てていくことはすごく大事だと思うんです。

<01:37:11>

伊達市長

結論から言うのはね。日本人は下手だけれどね。

<01:37:15>

大部委員

で、よく子どもたちの言うこと、単語では言うんですよ。だからコーチこれって。いやコーチこれって私はこれではないって。ということから、やっぱり言語の習得が本当に幼すぎて。子どもたち。でそれを、大人が先に汲む、これを片付けて欲しいのねって先にやっちゃうから。子どもの思考が育たないからこういうことに波及して行って、いいことも悪いこともわからないとか、行動が意味不明なことになってしまうとかってなってるんじゃないかなって言うのは、思う。何かその辺が教育の何かいろんな施策って言うか、作戦的なことで何か繋がっていくといいなっていうのはすごく。カリキュラムをかけるだけじゃなくて、これやってたらこれも何か補えたみたいなことが少し出てくるといいのかなっていうのは思うんですけど。

<01:38:07>

伊達市長

だから、英語教育に力を入れている□□□□まあ、ALTの

配置率は、県で一番ですから、はい。ですからその外国人の先生方がね、大部委員が言われるように、ちゃんと私はこうする。最終的に言えるようになれば。英語はそげなんなっちょうけん□□□やりますけん健作先生が。英語を使って。ほんとだほんとだ英語は□□□□日本語は□□□□だらだらだらな言って最後に結論

山本教育長

□□□□自分は全然□□□□英語□□□□思います。

伊達市長

そうそう。

<01:39:21>

伊達市長

この資料が□□□□4ページ。この、小学校も中学校も、ボランティア活動、地域行事の参加□□□□って書いてあるんですけど、これは、この、実際に、やってることでしょ。小学校中学校。

????

はい。運動会の□□□□とか□□□□

<01:39:50>

伊達市長

これがもっとどんどん。だから三中の子どもたちかね、やっぱり、意識が高いのは。やっぱこれをやっとするからっていうのでね。だから小学校の時からどんどん、この活動がボランティア活動が盛んになるとね、いいと思いますけれどね。□□□□ボランティアも、まあ、こんなことをやってくださいよってということだけど、いいように使っとするわけじゃない。子どもたちが考えて、外江の公民館は祭りなんかは完璧に中学校考えてやるでしょ、中学生がな。ああいうことをやらせればね、失敗して、十河さんが言うように、失敗してもええけど、自分やちでね、やらせるのが。それこそ思考判断表現力□□□□□ねえ。

<01:40:57>

中田委員

机上の論だけではなくて経験が一番身になりますよね。目で見てみんなで考えてということを経験してみないと、いくら勉強ですけんといって教科書だけ見ながらっていう。頭ではわかつつてもそれが体では受け止めないといけないですよ。そうなってしまいますからね。

<01:41:17>

伊達市長

知恵がつかますけん。あれして、自分たちで考えてやるってい

うのは知恵がね、結構つきますけん。知識は増えちよってね、わしゃもっと全然違ってね、□□□□ようはがーんとすごいある知識を学ぶことはようけあるけど、知恵をつけねばね。□□□□一番、一番ええと思いますよ。で、南部町は自然も多くて、じゃん知恵がつきますわ。しゃんここで遊んじょーだけん。境港もいっぱいあーけど□□□□知恵がつくと思うわ。やっぱり知恵はね、コンクリートの中ではつきません。悪知恵ばかりつく。自然の中は生きる力□□□□生きる知恵がつく□□□□脱線しましたけれど。

<01:42:25>

山本教育長

そうやって子どもが豊かに育ってくれる環境が、市長は何回もおっしゃるんですけどその、失敗を許せる大人。また町。で、僕らもそうで、昨日もそんな話したんですけど、わざと足引っかけて転ばずみたいな。それで、そんなうち来いや、消毒しちゃーけんとか、ほんね肩貸すがんなんて。何かこう、あれをこっそりわかっててやってることっていうのが、実は小さなおせっかい。余計なお世話だって言って1から10まで取ってしまうといけませんけど、ちょっとしたおせっかいを、みんなでやりあっこするまちになると、子どもも育つ地域も育つ。困ったら、独居のおじいちゃんの雪かきはね、んな庭先ぐらいたったらすーがんで、何かぱっと当たり前でできるってか、ごみがあったらひよっと取れるっていうことに、将来は絶対夢見て、やっていくといいなあという具合に強また思いましたんでね。

<01:43:36>

伊達市長

まとめてもらいました。何時までだ今日は、今、鐘がなったっけ。うん。何時まで、予定は何時だ。予定はもうなし。6時半までやってそれから移動して続きは。

角本補佐

皆さん予定があると思うんで。

伊達市長

ということで。最後に、日本海新聞の「VOICE」という特集記事、ちょっとこれ紹介してください。若林先生。

<01:44:13>

若林主幹

境港市出身の足立あゆみさんなんですけれども、まだ、投票の年齢は下がったんですけれども、立候補の年齢については、まだそのままになっていて、立候補の年齢を18歳に下げようというような活動をされております。で、あのいろいろな子どもの権利と

ということで、こういった形で□□□□なんじゃないかということで活動されているものになります。今、実際に今後ですね、やはりあの、こういった足立さんのような□□□□子どもたちが□□□□たいというのが出てきたらいいなという風に考えているところです。以上です。

<01:45:00>

伊達市長

まだ□□□□るとですね、本当に、「若者に自分で考えて自分で決める権利を与えるということが重要」と書かれています。そのひとつとして、立候補年齢の引き下げが欠かせないとかいって、まあ、いろんな熱い、ばちん、はっきり言われていますけれども、足立さんね。こういう人がおられるんで、子どもたちの前で、帰ってきたときに何か主権者教育の一つになるかと思って、どうですかって言って、思っておるところです。

<01:45:52>

角本補佐

3月にあゆみさん帰って来られるみたいなので、そのときもし会えたら、ちょっと話ができたら□□□□

<01:46:04>

中田委員

この記事もあれでしょ、本人が直接かけあったっていう話。

<01:46:10>

伊達市長

そうそうそう、載せてもらえるなら自分も載せてもらいたいってということで。ゆはらさんの息子さんが「VOICE」に投稿してって、出とって、私も出たいって。日本海新聞に出したんです。

十河委員

すばらしい。

<01:46:27>

大部委員

主体性のある行動の□□□□これだけに限らずね、なぜ私が動いたのかとかを子どもたちに話して、ねえ。そしたらやる気のある子どもたちも出るかもしれない。

<01:46:43>

中田委員

なかなかこまでの行動力というのがだれもが持てるわけではないけど、やっぱりこういう人が出てきてくれたっていうことではね。

大部委員

年齢の近い人の話のほうが絶対響く。

中田委員

ちょっとお姉さんっていうかね。

大部委員 うちの代はね、□□□□

中田委員 もしかしたら、次の十河さんが出てくるかもしれない。

大部委員 ネクスト十河

<01:47:24>
山本教育長 伊平屋に行かし、あの、行ったとき。

伊達市長 伊平屋いった子？

大部委員 追いかけていくべきですよ。□□□□そういうのをしていくと、そういう人材になっていくんだというので。

角課長 また、こっちに帰ってきてくれるといいですけどね。

柳楽 支えてくれる人にね。

山本教育長 □□□□たぶん出会われて行きたいと。そういうときにやっぱり立候補はやっぱり自分で行動したんでしょうね。こういうことにつながっているということは。

<01:48:29>
伊達市長 また、こういう人がね、こういう人を育ててくれると。

山本教育長 □□□□刺激を受けつ人たちがいればなおさら□□□□嬉しいことですね。

伊達市長 日本海新聞さんにお世話になった。これ、わしが見つけたんです。わし読んどって、持って行ったんです。読んでなかったけん□□□□記事持って行って。□□□□

山本教育長 □□□□しっちょーかって言って□□□□いや知りませんこんな子。□□□□あっちゃー□□□□叱られる□□□□

渡邊委員 私はわかりました。□□□□隣のクラスの

伊達市長 それでは「主権者教育について」は以上とします。

本日予定しておりました協議・調整事項は以上となります。どうもありがとうございました。